

エンヤンドッセーの掛け声が消えた

— 別府向浜の漁撈民族 —

入江 秀利

東の沖が白らみはじめた頃、ケーソンの向こうの海の

なかから、よく「エンヤンドッセー」の威勢のいい声が

湧きあがっていた。ケーソンによじ登って沖を眺めると、

二艘の網船に乗った大勢の漁師が、大きな掛け声で網を

曳きあっていた。海が赤銅色に染まる頃、掛け声のうね

りは一段と大きくなり、網の銀鱗が見えるようになると、

力強い調子が、楽しい調子にかわった。ケーソンの上

でワクワクしながら眺めた幼い頃の思い出である。

向浜は、朝見川の川口に舟溜りをもつ漁家の多い地域であった。

漁業は、海という自然が相手であるから、独特の知識や素質を必要とし、漁具や漁船のような特殊な器具を使う産業である。だから、地つきの漁師は代々伝統を受け

継いできた。

いまでは、網元の舟に大勢の網子が乗り組んで漁をする網漁がなくなり、伝馬で沖に出て一本釣や刺し網の漁をする漁師が少しだけ残った。近頃は、魚の種類や漁獲量も減って、一昔のような盛況は失われてしまった。

伝えられてきた漁業の習わしも、しだいに行われなくなり、残照にひとしくなった。昭和四八年に、私は向浜の古老を訪ねて、明治の終頃より昭和のはじめまでに伝承されて、実際に行なわれていた習わし（漁労慣習）を採集した。ここに記録しておこうと思う。

漁業の一年

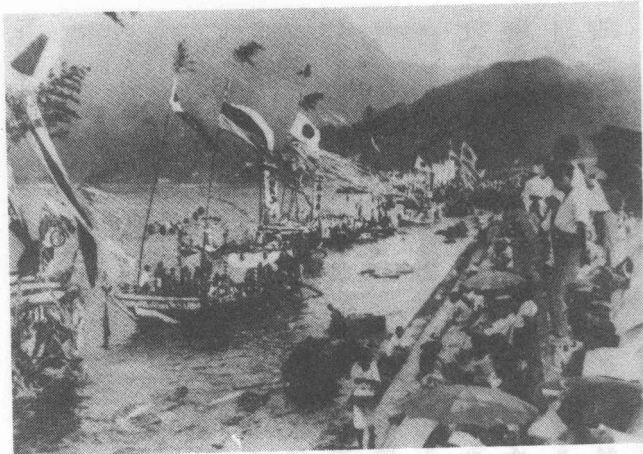
一月二日にノリゾメ（乗初め）をした。未明（午前三

時頃より)に漁師が、藁で作った容器に正月料理や雑煮などのを盛り合わせて、自分の舟のフナダマサマにお供えして一年間の豊漁をいのった。米沢のお爺さんは亡くなるまでお供えを絶やさなかった。

一月十日は十日エビス(十日恵美須)といい、網元(ムラギミ・村君)毎に、網船に乗り組むオーゴ(網子)を招いて酒宴を催した。十日エビスは、エビス祭や年始の寄り合いではなく、一年間を通して網舟の乗組や持ち場をきめる寄り合いである。つまり、瀬戸内海地方のオダマオコシ(網霊起し)のような乗組みを結成する会で、網舟ごとに網元と乗組契約の意味をもち、この日に乗船中の役割も決定した。

七月二十七日は住吉祭(以前は旧六月二六日)で、宝暦四年に大坂より勧請した住吉社の祭礼で、海上渡御があった。

神輿は、株持十二軒のワケEMONがかついだ。行列は赤いカタマワシをつけ、赤や白の六尺を腹に巻いたホーアンエが先導し、海上渡御のときも權テンマに乗って先達をつとめた。



き)漁の口開け日である。

十一月十五日にはゲンブク(元服)の祝いがあった。ゲンブクは、満十七才になった男子がワケEMONの仲間にはいるお祝いである。この日成人する者は年寄から紋付を借りて朝見八幡に参詣した。ゲンブクしたワケEMON

十月にはオーオロシ(網下し)があった。この年はじめてイワシ網を海に入れる日で、網元の家

ンは、オーゴとして認められオーブネ（網舟）に乗ることができ、この日から一人前のブワケが貰えるようになった。

オヒマチ（お日待ち）は、正月・五月・九月の十四日の夜から十五日の朝にかけて、夜通し寝ずに過ごした。オヒマチの場所は廻り番でうけもち、当日は夜と朝に朝見八幡の神主を招いてお祓いをあげてもらった。

このほかに、鱒網が大漁で一晩に、二斗樽で二五〇杯もとれると、セントルイワイ（千樽）をして、網元が網子を招いて盛大に酒をふるまった。しかし、不漁がつづくとき、網子同志で運を呼ぶためにマンナオシをた。この日は、朝見八幡様の神主を呼んでお祓いをあげ、網子の手出し（ゾーヨ）で酒宴を催した。漁が三十杯にも満たない不漁のときには、選ばれたワケーモンが、祓川の市エビス詣をした。

沖で海になん込まれる

女神さまのフナダマサマ（船霊様）は、猿がお嫌いだ

から、「サル」といったらお怒りになる。また「サル」は魚が「去る」に通じるので、うっかり「サル」というと真冬でも海に投げ込まれた。

船のトリカジ側の船縁（アンマイ）は上座にあたるので、間違つてアンマイから小便でもしようものなら、たちまち海に投げ込まれ、船のまわりを三周泳がされた。

ヒブリで二艘の網船が向かい合つて鱒網を曳くとき、内側に向つて小便をしてはならない。訳はおおかた見当が付くが、沖で口笛を吹いてはいけないのはなぜだろつ。

向浜の舟溜りに、よく沖で拾つた土左衛門「シビ」を曳いて帰った。

シビを拾つて懇ろに舟に上げてやると漁があつたが、そのまま流してしまえば、その日はかならず不漁になつた。シビを舟に上げるときには、必ずアンマイから上げてドウ（舟の表側）に積むようにした。降ろすときは、乗せるときは反対に、オモカジ側から降ろした。舟に上げずにコイ（漕）で帰るとタタルといわれたので、無理をしてでも船に積んで帰った。

シビをドウに積むのは、トモでは櫓が漕ぎにくいこともあるが、フナダマサマがトモを向いて祀られているので、不浄を避けたそうである。

赤子が生まれたらお七夜まで赤不浄、死にことがあれば初七日までが黒不浄。この間は沖仕事ができなかったが、鰯網のオーゴは赤不浄なら三日、黒不浄から七日間ブワケが貰えた。

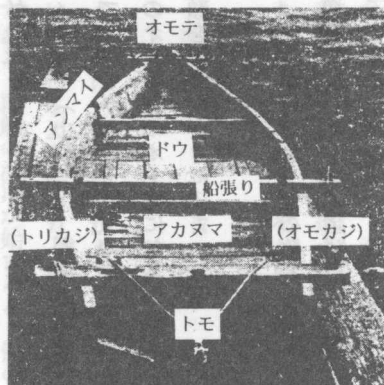
漁に出るとき、朝坊主に出会うのはマンがいいといって喜び、夕方ビクニに出会ったら、マンが悪いといってもう一度家に帰って出なおすほどゲンをかついだ。

ふなだま様（ゴシン）

新造船ができあがると、船大工は仕上げに船梁（張）のトモ向きの側面にゴシン（船霊）をいれた。

向浜のゴシンは、両親の揃った娘さんが白紙で折った男女一对の紙人形と、柳の木で作ったサイコロ三個と、銅銭十二文で、船梁に埋め込んだ。サイコロは長方体の

真ん中に切れ目を入れただけのもので、銭は閏年には十三文入れた。ゴシン納めは、船大工がトリカジから船に乗り、恭しくゴシンを納めて、オモカジから降りたそうである。



マ様がしげる」「フナダマ様がいさむ」と教えてくれた。

夏のアナジはお天気

風で天気を知るのは漁師の特技だ。こどもの頃遠足の前に向浜の漁師さんによくお天気を聞きにいった。

コチ（東風）は凧になる、マジ（南風）は夏は雨の日が多いか雨がちかい、アナジ（北風）は晴天だが、冬はスバエ（小雨）る。キタコチとコチマジはいずれも時化るといわれ、よくあたった。

日和見は、南の「タカザキ」と西の「タケンツジ」、北の「カナゴエ」の山々を目印にした。

「タケンツジ」は鶴見山の頂上付近のことで、春夏秋冬にアナジが吹いて、北から雲が掛ければ晴れるし、冬はスバエる。また、マジが吹けば南から雲が掛かり、タイガイは雨になる。

秋から冬にかけて「タカザキ（山）」に沖から雲が掛かれば、風がなくてもしだいに波が高くなって時化になる。アナジが吹いて雲が「カナゴエ」の上を北から南に向けて動けば、田の浦の沖で鱒の漁がある。

「朝日がギラつけば、その日もたん」。たしかに、その日のうちに雨か風になった。また、朝日の左ベタに真っすぐ虹が立てば雨の前兆で、これを「タチモン」といっていた。

オーゴの分け前

網元は町網、元網、新網、兵網などがあつた。この網元のことを、オヤカタ、アミカタ、ムラギミと呼んでいた。網子は、オーゴとかノリコと呼び、へいそは一本立ちして釣や刺網などのシヨバイをする漁師（コマイ）が大部分であつた。

コマイ（小前）は、網漁の時期にはシヨバイを休んで、どこかのオヤカタの網船に乗るオーゴになった。どのオヤカタのオーゴになるかは、十日エビスの直らいに顔をだしたときに決まつた。

ブワケは、ヒブリの終わりにまとめて分配された。総漁獲額からゾーヨ（諸経費）を天引して、オヤカタの三分割を差し引いた残りが、オーゴの分け前となった。

オーゴの分配は、漁に参加した日数によって公平に配られた。ただ、ワケーモンは、並みのオーゴにくらべて何人前もの仕事をするので、分け前を多くした。ワケーモンを怒らせて仕事を投げ出されては、たまつたもので

はない。分け前に不服のあったワケーモンたちが、網を担いで質屋にいったこともあったとか。

また、ゲンブク前のコドモのはたらきも、捨てたものではなかった。テ舟を漕いで網船と港の間を行き来して鱒を運んだり、沖で魚群を見張ったり、漁がおわって網船やテ舟の後片付けなどを引き受けた。コドモ（十二才より十六才）は、年や働きに応じて、オーゴの七分、半マイ・四分の分け前が貰えた。ワケノコリは、年寄の酒手などに振る舞われた。

鱒網に入った鱒いがいの魚をコイヨとかヨリモンといった。これはワケーモン頭が始末して、その儲けをワケーモン組の懐に入れた。また、網船やテ舟に残った鱒はニゴリーといい、舟の後片付けをするコドモたちの取り分となった。

オーゴに男子が生まれると、オヤカタは、誕生日からその子にブワケの一分「ブイチ」を与えた。あるオーゴは、オヤカタの面倒見がいいというのか、生まれたとき

からオーゴに縛り付けられたのかわからないといって笑っていた。

網船に乗れなくなった年寄で、遠目のきくものは魚見台で魚の群れを探し、海岸で網の繕いをしたり、網の煮沸や網干し、船底の焼き入れなどヤクをすれば、オヤカタから半マイのブワケが貰えた。

漁期

漁期は、鱒の漁期がもっとも永いが、大体の魚の漁期は八月ころより始まり、秋にかけて最盛期を迎えたそうである。網船の漁期が始まると、例の「エンヤンドッセー」の威勢のいい掛け声が海から湧きあがってきた。

冬の夜、暗い沖にイカ釣りの漁り火がゆれるさまは、幻想的であった。太い光の帯が二重も三重も長くつらなっていた光景は、今では見られなくなった。

根付魚は年中とれるが、マワリウオ（回遊魚）といわゆるシュンの漁期を表にしてみよう。

焚いて鰯を集めて網を入れる。二十人ほど乗れる四挺櫓の網船二ハイ(體)で両方から網を引き合つて鰯を一網打尽にする。この二艘の船は、左の船をサカアミ、右の船をマアミといった。

ヒブリは、一晚に三、四回網を入れた。とれた鰯は、コドモがせつせと港に運んだ。

鰯の漁期になると、ヒブリだけでなく早朝から四・五杯のテ船が沖に出て鰯の群れを見張り、群れを見付けると旗をふつて陸に報せて網船を呼んだ。

寒に入った旧曆十二月から三月にかけて、マンがいいとエトコすくいができた。エトコは鰯の群れが大玉のように塊つて海上に浮き上がったもので、漁師はそれをタブですくった。多いときには短時間で舟いっぱいになり、漁師には思わぬ実入りがあった。

エトコができると海の色が変わる。鰯がウの鳥に追いかけられて、群れ合いもみ合いして塊りになり、海上に盛り上がってくるからである。それを目掛けてカマ(い

るか)が集まる。それを漁師が追つて懸命に櫓を漕ぐ。漁師とカマの壮絶な競走を「カマ追」といった。エトコにクジラが寄ることもあった。

この時期は、網漁をする時期なので、エトコすくいは個人の漁師にとって貴重な収入となつた。

かつお まぐろ ぶり

冬から春さきにかけて、かつお、まぐろ、ぶりが回遊してくる時期になると、シモ山(高崎山)の沖に定置網を仕掛けてこれらを狙つた。

大敷網を張る権利はオヤカタにあり、網はコマエに一人何反と割当ててすかせた。大敷網はシユロ糸ですいたので、指先が剥けることがしばしばあった。

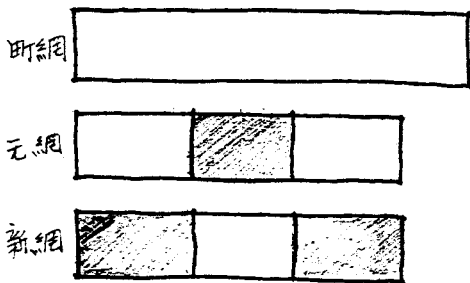
向浜のトミ台(魚見台)は、東別府駅の南の高台にあったマー山(浜脇海岸の埋め立てのために削られた)と、両郡橋の大分より(鎌崎)のクラ谷の高台にあったシモ山の二か所にあった。

シモ山の見張りは、遠目のきく年寄と、連絡に走るコ

ドモ三・四人が早朝から詰めていた。

トミミ台の年寄は、ただ定置網の見張りだけではなく、沖を泳ぐ回遊魚の見張りもした。

まぐろやかつおは、北の亀川沖から南下してきた。トミミ台から眺めると、凧の日には上人浜や餅ヶ浜の沖辺りから、ちよど船の航跡のような小波が立つのが見えたそうである。

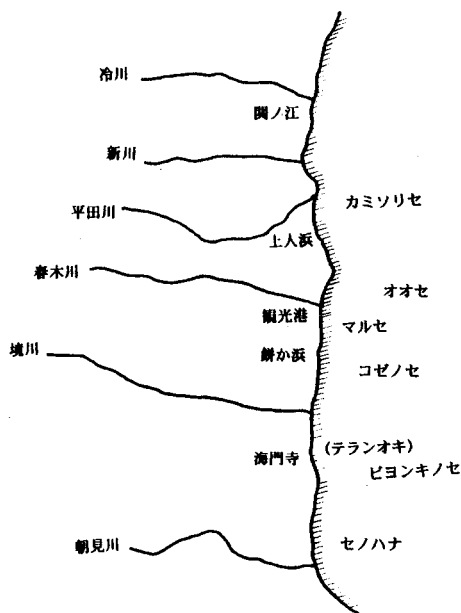


トミミ台で回遊魚を見つけると、見張り同志で競って合図の旗を振って港に報せた。旗印は、町網が横六尺縦一尺で無地の「白」、元網は横五尺縦一尺で中央を黒く染めた「中黒」、新網は両端を黒く染めた「端黒」であった。

もちろん最初に旗を振った網元が優先して網を入れ

る権利があった。他の網船は下手に網を入れるようになるので、発見の遅れた魚見役は後でオヤカタにドヤされた。この時期は、いわし漁の時期と重なるので、報せを受けた網船は、まるで戦争場のような慌ただしさで、鯛網の袋とイチという太糸ですいたシビ網の袋に付けかえて海に入れた。

五つの瀬



横灘には、根付き魚がつく瀬が五つあった。

ピョンキノセは、テランオキ（海門寺）から朝見川が流れこむセノハナまで、小さな瀬が連なったもつとも広い瀬である。セノハナから南の高崎山の沖にかけては急に深くなるので瀬の端といった。餅ヶ浜の沖がコゼノセ。春木川の流れこみのマルセ、その少し沖にオオセがあったが、マルセは観光港の埋め立てで姿を消した。上人浜の沖のカミソリセは、岩礁が鋭くて網をよく切った。

おわりに

水神様や荒神様は、水道が行きわたり台所が便利になつたために、日常生活のなかから影をひそめてしまった。水や火に関する民具は用を足さなくなり、納屋のすみや庭のあちこちで朽果てようとしている。

昔と生活の様式や生産の形態が変わってしまった現在では、つちかわれてきた文化の価値は薄れてしまった。何代もの長い間の生活や生産の活動を通して練りあげてきた叡知の結晶の民具も、精神のよりどころとして崇め

られてきた民間信仰も、その働きを失ってしだいに消え去ろうとしている。

民俗資料は、日本人の信仰、社会、生産などの生活の基盤としてとらえることができるし、本来の日本人の生活は、これらを継承してきた人々の生活のなかにあったと思う。だから、伝承されてきた事柄や習わしの由来を尋ねると、そこに日本人のものの考え方や生活態度の骨組みが見えてくるような気がする。

舗装道路のかたわらに追いやられてしまった道祖神や地蔵尊に再び命を蘇らせることはむづかしいが、消え去ろうとしている伝承や信仰のあとや民具を記録し、保存することが私たち世代に課せられた義務のような気がする。

この文は、昭和四十八年に舞幹藏さんのお世話で高橋虎一郎（当時八四）舞穂三（八一）永井和田平（八一）米沢辰造（七六）さんにお聞きしたものを記事にした。